

イチジクの樹体ジョイント仕立て

～台木を利用したイチジク栽培での作業性改善と早期成園化～

鬼頭 郁代（農業総合試験場園芸研究部落葉果樹研究室）

【平成25年3月15日】

【要約】

イチジク株枯病対策として、病気にかかりにくい品種を台木とした接ぎ木樹による栽培がある。これに、隣接する樹の主枝部を連結する樹体ジョイント仕立ての技術を組み合わせることで、主幹が長くなりがちな接ぎ木樹で樹高の抑制を図っている。苗木の作成から2年後を目安に主枝部を連結して樹形を完成すれば樹冠拡大が完了し、成園並の収量を得ることができる。

1 はじめに

樹体ジョイント仕立ては、複数樹の主枝部を連続して接ぎ木で連結し、直線状の集合樹として仕立てる手法である。日本ナシの早期成園化、栽培管理の省力・効率化等を目的に開発され、現在、他樹種への応用、実用化のための試験を行っている。

イチジクでは、土壌病害の一種であるイチジク株枯病の発生が問題となり、対策として、病気にかかりにくい品種を台木に利用した接ぎ木樹による栽培が導入されつつある。イチジク株枯病の感染抑制には台木部分は長い方が望ましいが、一文字整枝に仕立てると主枝の分岐位置が高くなり作業性に影響する。

そこで、一文字整枝の作業性を維持しつつ、接ぎ木樹による栽培が可能な手法として樹体ジョイント仕立てに着目し、試験を行っている。

2 供試樹の概要

台木として「イスキアブラック」、穂木に「柘井ドーフィン」を用いた。台木長が40cmとなるよう長さを調整し、接ぎ挿しにより苗木を養成した（写真1）。

接ぎ挿し木苗は、発芽後、新梢が数枚展葉した段階では場に定植した（写真2）。1本の新梢を主枝候補枝として養成し、翌春に水平誘引して主枝とした。

主枝の連結は接ぎ挿し木苗の作成から2年後の春季に実施し、樹体ジョイント仕立てを完成した（写真3）。

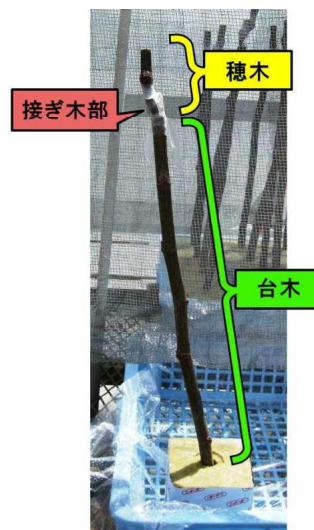


写真1 苗木の作成



写真2 定植後の接ぎ挿し木苗

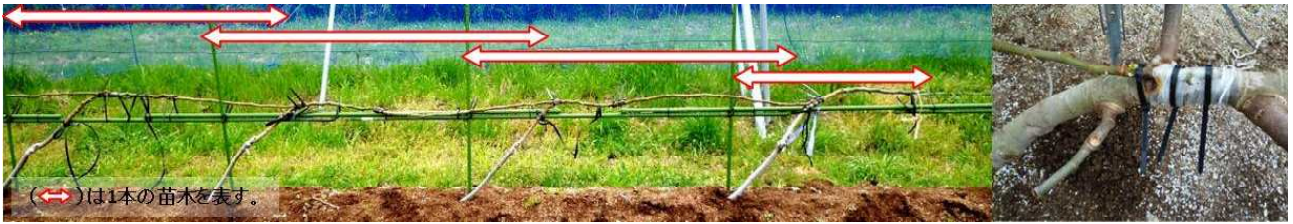


写真3 主枝連結直後の樹体ジョイント仕立て（右図は連結部分）

2 樹形の仕立て方と特徴

(1) 苗木の作成

樹体ジョイント仕立ては、1本主枝の苗木を一方向に誘引し、隣接樹と接ぎ木して完成させる。苗木を斜立で定植すると将来の主枝となる新梢の発生位置が低くなり、樹高を抑制できる。

(2) 主枝の連結

養成した主枝候補枝の先端と隣接樹の主枝基部を接ぎ木により連結して、樹体ジョイント仕立てを完成する。主枝連結の時期は、早期に成園化するため苗木作成から2年後の春季を目標とする。連結する枝は1年枝どうしの場合に活着しやすく、枝の年次の差が大きかったり利用する部位によっては活着しにくいことがある。

(3) 結果枝の生育および果実生産

苗木作成の翌春に水平誘引した主枝から結果枝を養成し、果実を着生させる。収穫初年は主枝長が短いため隣接樹との連結は困難な場合がある。単独樹での栽培となるが、着果は良好である。

苗木作成の2年後には主枝連結を実施するため、この時点で樹形が完成し、成園並みの収量を得ることができる。植栽間隔は現在検討中であるが、植栽間隔が狭いと樹勢が強くなる傾向がある。

(4) 一文字整枝との比較

樹体ジョイント仕立ての基本的な主枝の配置は一文字整枝と同様である。接ぎ木樹では主幹が長くなるが、斜めに定植することで樹高を抑制するため、作業性については一文字整枝と変わらない。一文字整枝では主枝の基部と先端部などに結果枝の生育にばらつきがでやすいが、骨格完成初期の樹体ジョイント仕立てでは比較的、結果枝の生育が均等になる（写真4）。



写真4 摘心期の樹体ジョイント仕立て

3 今後の課題

樹体ジョイント仕立ては、苗木の定植後早期に隣接樹と連結して樹冠面積を拡大するため、多くの苗木が必要となる。また、接ぎ木苗の養成を更に効率化することが課題である。

樹体ジョイント仕立て樹では、植栽間隔に加えて、経年により樹勢が変化することが考えられるため、今後も検討する必要がある。

※ 本研究は、農林水産省「新たな農林水産政策を推進する実用技術開発事業」で実施しました。

Copyright (C) 2013, Aichi Prefecture. All Rights Reserved.